待している。さらにまた、私自身が自らの大志（野望）を彼らに語りかけていくことも、ロール・モデルを提供するという意味からも大切なのではないかと思っている。

４．最後に

未熟者がやたらに大きなことを述べてしまったが、「現在から未来へ」を志向する内容という原稿依頼であったので、自らの夢（野望）を大きく語ったということで御容赦いただきたい。これから、ここで述べた抱負に向けてコツコツと努力していくことが大切なのであろうと考えている。

尚絅学院での研究・教育に対する抱負※1

池　田　和　浩（人間心理学科講師）

はじめに

研究履歴：朝、起床して身支度を整えたのち、職場へ向かい、どの仕事から片づけなければならないか、山のような書類を見て思い悩む。日々の生活の中で、私たちは、何をしなければならないのかを意識することが多くあるが、「自分が誰であるか」を特に意識することは少ない。なぜならば、“昨日の私”と“今日の私”は時間的連続線上に存在する同一の人物であることを無意識的に理解しているからだ。ここに寄与しているのが“記憶”である。つまり、人は“自分自身に関する記憶の変化の少なさ”を拠りどころに、自己の同一性を確認していると言える。

しかしながら、通常考えられているよりもはるかに大きく、記憶はその形を変える。高齢者になれば、「最近、物忘れが激しくなった」や、「昔に比べて新しいことを覚えられなくなった」と意識する確率が高くなるだろう。では、大学生のような“若い脳”を持つ若年層には記憶の変化が起きにくいということであろうか。右図を確認していただきたい（図１）。これは、本学の学生が世界的に有名なアニメキャラクターを記憶スケッチした結果である。

図１．某キャラクターの記憶スケッチ

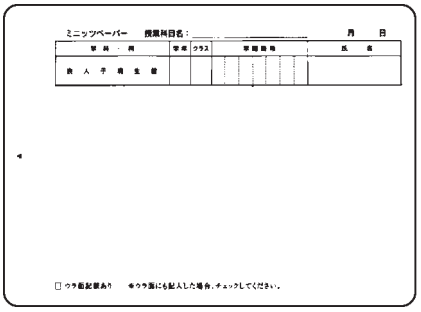
どの年代層においても人の記憶は容易に変化することが予測できる。“最も強いものでもなく、最も賢いものでもなく、最も変化に対応できるものがこの世に生き残る”との考えを種の起源のなかでダーウィンが著したのは有名な話である（実のところ、この記述をダーウィン自身が著したわけではない）。この考えに基づけば、我々は、記憶を“変容させる力”を身に着けることによって様々な恩恵を受けてきたと予測できる。筆者はこれまで、“記憶の変容”と“語り直し”をキーワードに認知心理学的の観点から一連の研究を行ってきた。複数の実験的検討を行った結果、辛い体験の記憶を“肯定的”な側面から語り直すことは、保存されている記憶そのものをポジティブに変容させることが確認された。辛い記憶をいつもとは少し違った側面からポジティブに語り直すことには、“変化”による恩恵をもたらす作用が存在するとい

える。

教育履歴：筆者が尚絅学院大学に着任したのは2011年４月、東日本大震災発生して間もない時期であった。11年４月以前は、山形大学人文学部において約２年間、助教の職務に従事しており、そこで基本的な教育能力・教育用資料を構築できたと考えていた。

しかしながら、学部時代・大学院時代・助教時代とすべて国立大学に所属していたため、私立大学への所属は非常勤講師を除けば本学が初めての経験であった。そこで、着任してからの２年間は、私立大学の講義スタイルに合致する資料作成を集中して行った（現在も継続して資料改訂中）。特に力を入れたのは、大人数講義におけるグラフィカルな資料提示および双方向コミュニケーションを前提とした講義進行である。

現在の担当科目は、専門領域である“認知心理学”に加え、学部生および大学院生を対象とした心理学専門領域の講義および演習が中心である。そのうち、100名弱の学生が受講する講義では、ミニッツペーパーを使用した質問への回答を行っている（図２）。ゼミや30～40名程度の少人数講座であれば､教員からの質問に対するレスポンスは比較的容易に得られやすい。ところが、大講義室を用いた授業となると、質問に回答することに萎縮する学生が多く、講義内での双方向コミュニケーションが成り立ちにくい（「わかりません」とのレスポンスの増加や、小首を傾げるといった行動が生じやすい）。そこで、講義の中で生じた疑問や感想をミニッツペーパーに記入し提出させることにした。


ミニッツペーパー　授業科目名：　　月　日

学科・専	学年	クラス	学籍番号	氏名
教人子専生徒				

□ ウラ面記載あり　※ウラ面にも記入した場合､チェックしてください。

図２．ミニッツペーパー

このコミュニケーション方法で改善されたことは、①筆記時間の確保、②授業運営対応の即応性の向上､の２点である。筆記時間の確保であるが、パワーポイントなどを用いた資料提示の場合、学生は“説明”と“筆記”を同時に行う必要がある。そのため､「書くだけで精一杯で講義内容が頭に入ってこない」といった意見が噴出しやすい。そこでスライド内容を筆記する時間を確保しつつ（スライド１枚に対し30秒～１分程度）、ミニッツペーパーに寄せられた質問に回答している。また、ミニッツペーパーの使用することにより、積極的に手を挙げて発言することが避けられるような小さな意見を収集し即応することが容易である。たとえば､提示スライドの問題（e.g. 光量、色覚）や授業スピードに対する意見が頻繁に記入される。これらの意見を取りまとめて対応することで、全ての受講生が聴きやすく、記憶しやすい講義に改訂していくことが可能である。

今後の教育・研究の抱負

研究のかたち：“記憶”研究から“認知”研究へ

筆者はこれまで、“記憶”と“語り直し”の関係性を、認知心理学的視点から系統的に検証してきた。ここでは、これらの研究成果を基盤として、本学において今後どのような研究を行うのかについて将来的な展望を考えてみたい。

認知（Cognition）とはラテン語のCognoscere（= to know）が語源の言葉であり、生体の

情報収集と情報処理過程の総称を意味する。つまり、外界から得られた情報を視覚・聴覚・臭覚・触覚・味覚・運動感覚などといった感覚器官で処理する働きと、感情・記憶・思考・学習・発達といった内的情報の処理過程を統合したシステムといえる。また、近年さまざまな研究領域と成果を共有する学際的な動きが活発である。たとえば、脳科学の発展に伴い、認知心理学と神経心理学とは密接なかかわりが生まれている。この他、言語学や哲学などといった領域との学際的な研究協力が積極的に行われている。

ここから鑑みるに、筆者のこれまでの研究は内的情報処理に特化した、他の研究領域から孤立したものであったと考えられる。そこで今後は、より学際的な視点に立った研究を行っていきたい。メインテーマは従来から行っている記憶の変化にかかわる研究であるが、ここに様々な関連変数を投入させていくことを考えている。

現在検討している変数としては褒め・創造性・ユーモアといった“感性”である。褒めることは、本当に記憶（学習）に良い影響を与えるのだろうか。創造性に富む人物は、保有する記憶をどのようにリンクさせることでアイディアを次々と創出しているのだろうか。このように、従来言語化することが困難であった認知的トピックを研究の中に取り込むことで、研究の領域を広げ、その質を向上させたいと考えている。

ここで問題となるのが、得られたデータの妥当性である。上述した通り、心理学的変数は主観的なデータを取り扱うことが多い。そのため医学や生理学的といった客観的なデータを併存的に取得するといった対応を取ることで、心理学的変数によって得られた結果の裏付けを取ることが求められる。近年、脳科学的なデータ計測は目覚ましい技術革新が進んでおり、移動しながらの脳活動計測や、複数人の脳活動を同時に計測することが可能になっている。こうした機材の進化はこれまで脳活動のデータを取得することができなかった実験デザイン（e.g. 複数人討議による記憶活性化の検証）に対応することが可能である。

また、こうした基礎的な実験研究によって得られた結果は、積極的に社会に還元したい。質的にも、量的にも、感性的にも肯定的な記憶を保つためには何が必要となるのか。震災によって受けた被害には、家や車といった物質的な損害だけでなく、精神的な苦痛も含まれる。このような苦痛を緩和することや元から絶つことができるような研究成果を積極的に発表していきたい。

教育のかたち：“知る”から“わかる・使える”へ

教育履歴でも述べた通り、筆者はこれまで双方向コミュニケーションを基盤とした講義を推し進めてきた。しかしながら、こういった講義スタイルは、あくまで学生の“知る”能力を向上させるだけで、得た知識を積極的に“使える”ほどに、情報を“理解”させることを可能にできたとは明言できない。たとえば、２年次に講義した内容を４年次の卒業研究に主体的に活用できる学生は多くない。“知ること”を“使えること”に変化させるためには、講義の内容がいつでも活用できるよう、従来型の“聞く”や“書く”といった記憶方略を大幅に改善する必要がある。具体的な解決策として考えられるのは、主体的に講義に関わったという感覚を与えることができる“体験する”という記憶方略が挙げられる。講義の中で、簡単な実験やデモを実施することは、従来型のスライド提示による講座に比べ、情報を深く定着させるのに一役を担うと推察される。

しかし、大人数の講義で学生個人に課される実験や質問といった個人体験は、体験の中身が

学生個人のみに帰属するだけであり、従来的な“聞く”や“書く”といった情報と大きな違いはない。そこで、クリッカーやipadといったモバイル端末を用いた双方向コミュニケーションのオンライン化を押し進めることで、多数の学生に“共有体験”を与えることが可能になると予測される。折しも、講義の双方向化を促す授業支援システムが本学でも確立しつつある。今後はこうした機材を用いて、さらに即応性を高めた授業を行っていきたい。

また、研究と教育をさらに密接に結び付ける働きかけを行っていきたい。たとえば、学部と大学院の交流の活性化などが考えられる。卒研ゼミと大学院の交流を活発にすることで、情報の交流を図る。このような働きは、学部生の研究能力を高め、質の高い卒業論文を完成させることにつながるとともに、研究への志向性を高め、ひいては大学院の活性化につながると予測される。

※1　本稿は2013年3月22日に行われた尚絅談話会の講演内容の一部を改編してまとめた。

「永遠の愛を宣べ伝えるために」
－演奏する極意を追い求めて－

土　田　定　克（子ども学科講師）

【主旨】

「何故、何のためにピアノを弾くのか」―― 演奏することの意義を、物心ついた頃から追求してきた。青年期において摑んだそれは「人々の喜びのため」であった。しかしこの定義では、陰律や悲劇性を含む全ての音楽の存在意義を包括しきれなかった。そして最近、長い時を経てついに究極の意義に辿り着いた。それは「永遠の愛を宣べ伝えるため」である。

【背景】

この二年間、大切な人と別れることが相次いだ。震災をはじめ、家族の一人もこの世を離れていった。そして去年の暮には恩師メルジャノフ教授が永眠された。この敬愛する恩師の訃報を受けた時、なぜかシューベルト最晩年の『即興曲　変ト長調　作品90－3』が脳裏で流れ出した（この曲は少年の頃♭が6つもある調号のせいで譜読みに挫折して以来、触れてこなかった曲である）。しかもそれに追い討ちをかけるかのように本学子ども学科の石田一彦教授が急逝された。石田先生はたった前日、学科会で「あんまりぎすぎすしない方がいいよ」と鶴の一声を放ったばかりである。益々この曲が、頭から離れない。その理由を究明したいという思いから本学学生にもこの曲を奏でてその感じたところを問うてみたりした。そうした探求の末にとうとう見出したものは、思い出を振り返るようなこの曲の底辺に流れる深い悲しみの雫であった。強いて言えば、これぞ涙を湛えた「惜別の歌」なのである。因みに、この曲の作られた丁度1827年の3月にシューベルトの深く慕っていたベートーヴェンが他界している。

その様に敬愛する人々を次々と見送る中で、普段にも増して「永遠」について思いを巡らす